

## 総 括

鈴木 禎宏

一般に茶道は「日本の伝統文化」として論じられることが多く、それはそれで間違いではない。確かに茶道は日本の生活文化の一つの核として、歴史的に重要な役割を担ってきた。しかしその一方で、茶道が単に日本だけの問題ではないことも、また確かである。喫茶は大陸から日本にもたらされたものであり、茶自体に世界的な広がりがある。さらに、昨今の通信手段・交通手段のさらなる発達、茶道を世界に広めた戦後の日本側の努力、そして諸外国における日本文化への関心や日本研究の高まりを考えると、茶道を論じるにはこうした「世界」という文脈をも視野に入れることが必要であろう。日本をとりまく諸文化・諸関係の中で茶道を考えること、すなわち茶道を日本の内と外の双方の視点から見るという作業を踏まえることにより、「日本的なるもの」及び「日本的ならざるもの」双方への理解もまた深まる筈である。このセッションでは、議論をナショナリズムの言説に収斂させることを慎重に避けながら、茶道を通して世界における「日本文化」のあり方を考えた。

最初の報告者である熊倉功夫教授は、日本の茶道が近世から現代にかけて海外にどのように伝えられ、どのように理解されていったかを通時的に概観した。豊富な知識と高い見識のもとで、各時代における交流のあり方の特徴が、実証的かつ要領よく論じられた。アメリカにおいて、アメリカ流の茶道が模索されているという報告と、今後の交流においてはその質がこれまで以上に問われるという指摘は、特に興味深かった。

次に報告に立たれた田中仙堂氏は、社会学者としてカナダに留学し、カナダで茶会を開催したというご自身の経験をもとに、茶道の実践者の立場から茶道の国際化および、国際化という潮流の中での茶道のあり方について報告した。カナダ現地当局と田中氏側の交渉の過程、およびその交渉がなされた際の日加双方の社会的・文化的背景の違いへの指摘は、さすがに当事者でなければ知り得ない事柄で、貴重な報告となった。

三番目として、外国人が来日して茶道理解を試みた例として、イギリスの陶芸家バーナード・リーチの活動を、鈴木が報告した。リーチの日本文化理解の深まりは、彼の茶道文化理解と比例していることと、リーチが日本の「渋い」という美学に世界的な意義を認めていた点を指摘した。

最後の加藤恵津子助教授は、記号論およびジェンダー論の立場から、近代以降の茶道と女性の結びつきについて論じ、今日茶道をたしなむ日本の女性が英語圏の人々にどのような姿で捉えられているかを報告した。明治時代以降、「男性」が「芸術」という「精神的」なものを担うのに対し、「女性」は茶道を含めた「作法」という「身体的」なものを担うとする言説が生み出され、この言説がナショナリズムと結びついていたとする指摘は、新鮮であった。

今回のセッションには、研究者のみならず実践者にもご参加いただけたことにより、議論に広がりが出た。また四人とも、カナダやイギリス、アメリカ等の諸外国の動向を視野に入れつつ、日本で活動している点も、セッション全体に率直な雰囲気をもたらした。日本以外のアジアの視点から茶道を論じる発表者を招けなかったことは残念であるが、それでも専門と立場を異にする四人が議論を行えたことは貴重な機会であった。そして、茶の湯本来の姿は日本ではなくむしろ現代のアメリカに認められるかもしれないという熊倉教授の報告にみられるように、日本において「日本文化」が日々刻々と生成されている一方で、世界に出ていった日本文化が各地において様々な形で発展したり変質したりしており、それがまた逆に日本に影響を及ぼするという実態に触れられたことが、本セッションの収穫であったと考える。「国際日本学」のアプローチの一つとして、今回のように茶道を通して「日本文化」を成り立たせている諸要素・諸関係を立体的に解きほぐしていくような比較文化論の試みは、日本文化のあり方そのものを論じられる点で、有効であると思われる。